

薬草だより

古くから暮らしの中で親しまれてきました。

樋口 剛央*

生薬名：コウボク（厚朴）

薬用となるコウボクの基原植物：

・第十六改正日本薬局方（2011年）

Magnolia obovata Thunberg (*M. hypoleuca* Siebold et Zuccarini), *M. officinalis* Rehder et Wilson 又は *M. officinalis* Rehder et Wilson var. *biloba* Rehder et Wilson（モクレン科）

薬用部位：樹皮



ホオノキ（提供：橋本竹二郎氏）

ホオノキは樹高 30m に達することもあるモクレン科の落葉高木です。長さ 20cm 以上、ときには 40cm にもおよぶ長楕円形の葉は、日本の木本種中では最大級です。大きな葉は枝先に付き、その裏面は白色を帯びているので、初夏の山を遠くから観ると新緑の中に風で翻った裏面が白く目立ち、その存在を容易に見つけることができます。花期は 5～6 月で、枝の先端に直径約 20cm の淡黄白色の芳香性のある大きな花を付けます。

薬用にはその樹皮を用います。収穫は 6～7 月、夏の土用の頃に、樹齢 15 年以上の株を切倒して幹の皮を剥ぎ取り、日干して乾燥させます。この時期は、樹木の生長が最も著しい時期であるため、材と樹皮の成長部位の組織が柔らかいので、先がノミ状の剥皮棒を使用すれば人力でいとも簡単に剥離できます。日本各地に自生しており、主に北海道、富山県、長野県、岐阜県、香川県、鹿児島県などで産出されています。その樹皮は、乾燥品で 7mm になるものもあり、他の樹木と比べると厚いことから、厚い樹皮を意味する「厚朴」の名の由来となったと言われています。

薬用の歴史は古く、中国では『神農本草経』

の中品に収載され、日本では平安時代の医学書『医心方』にその名が記されています。効能は健胃、整腸、収斂、利尿、去痰、鎮嘔とされ、半夏厚朴湯、柴朴湯、藿香正気散、五積散、麻子仁丸などの処方配合されています。厚朴の基原植物は、日本では *M. obovata*、中国では *M. officinalis* とその変種の var. *biloba* と、同属ですが種が異なります。そのため、市場では日本産を「和厚朴」、中国産を「唐厚朴」と呼び区別しています。

薬用以外の用途では、その大きな葉に芳香や抗菌作用があることから、食べ物を乗せたり、包んだりする容器として古来より重用されてきました。大伴家持は、その葉を折りたたみ、酒を酌む酒器として用いる旨の短歌を万葉集に詠んでいます。現代でも朴葉味噌、朴葉寿司、朴葉餅といった郷土料理に用いられ、目にすることがあります。また、材は軽軟で加工しやすく、乾燥しても狂いが生じにくいことから、家具調度品、下駄の歯、ピアノやオルガンの鍵盤、和包丁の柄やまな板などに加工され、人々の暮らしの中で役立ち、親しまれています。そのほか、庭園や公園樹としても身近な樹木です。